

【Zigzag-memo No50 の 5】三浦梅園の陰陽と「反観合一」に学ぶ

三浦 梅園——江戸時代後期の思想家、自然哲学者、本職は医者。豊後国（大分県国東市安岐町富清）の出身——の考え方を参考に私の理解で記述します。参考図書は日本の名著（三浦梅園）と岩波文庫の「三浦梅園」です。

なお、以下で記述する「陰：陽」は、その性質において正反対であるが、しかし、優劣はなく、まったくの同等・同格であるということを強く認識する必要があります。

「反観合一」は「反して観、一に合す」、「反転して観察し、一に統合する。」と梅園独自の語法があります。西洋流に言えば「正・反・合」でしょう。「反観合一」は「反観」と「合一」という相反する二つの認識法から成立しています。「反観」とは、対象の「もの・こと」に対して正反対の対立物を想定して、一方と他方に相反する性格を見いだす認識法であります。この相反性は、相互に、かつ同時に、かつ等価に成立しなければならない。つまりAと非A（反A）があって、両者が共通の存在から分かれ出たものである場合、Aと非A（反A）は「一一」の関係にあるとされ、高次の共通の存在が「一」であるとされる。この3つの「一」を上から下に言うとき「一即一一」と言い、下から上に言うとき「一一即一」と言う。自然界においては、その森羅万象はこの連鎖が果てしなく続くと梅園は考えました。

その 1 ; 梅園独特の陰陽の考え方について (図-1、図-2を参照)

ー・・・ 森羅万象、「もの・こと」の本源（根源、本質、一元氣）は、一（一元氣）であり、かつ、二（陰陽）を具えて（内包して）いるものだ。一とはまだ陰陽の概念を与えられていない陰陽であると言える。一元氣はあらゆる対立を超越している。

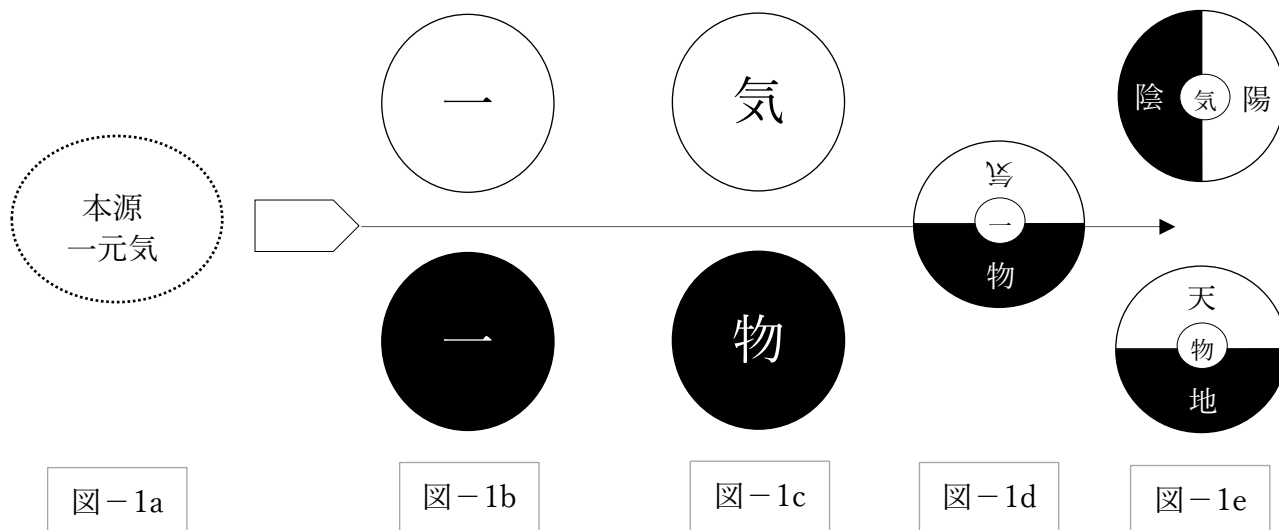
二は一一（陰陽）である。逆に陰陽とは既に概念を与えられた一一である。一一を合わせて見れば二であり、分けて言えば一一である。本源的存在を表す「一元氣」は、未分化の状態であり、カオスであって、形象化することが出来ない。

一と二の関係で言えば、一はよく二に剖析^{ぼうせき}をなし、その二は一と一に分かれてよく対待^{たいたい}に立つ。

だから一でありながらも二を^{さんりつ}竝立する。二は一を分かったもの、だから、竝とした二でありながらも一を求めて一である。

それを「一即一」、「一即一」である。前の一は何もかもが混成一体（混沌、未発・未分）の一である。後の一は、（捉えて見れば）開発・分化の陰陽は陰の一と陽の一である。・・・

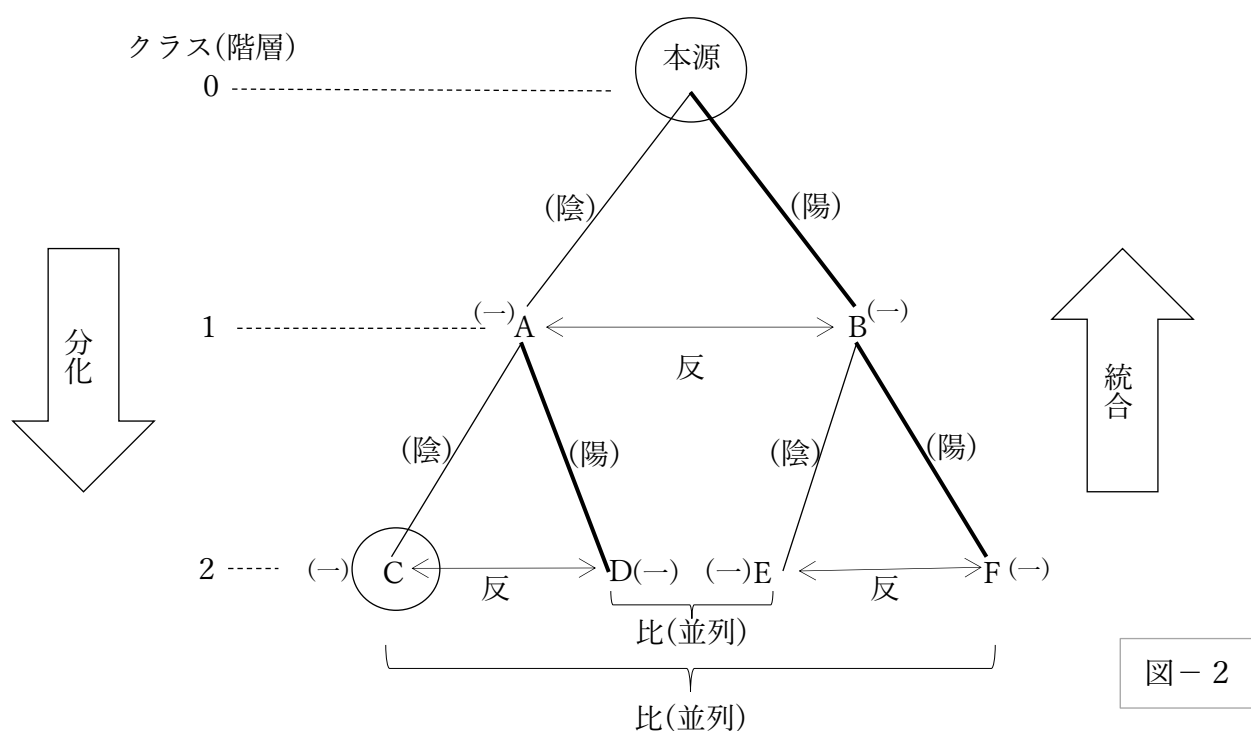
図－１において、図－１aの本源的存在を表す「本源（一元氣）」は、図－１b～１eを同時内包と捉える。気は見えないもの、物に見えるもの（存在するもの）、なぜ、見えない気を以って物というか、見えると認識するからそこに物が存在するということと同存・同値となります。統合すれば一、分化すれば一一（すなわち二でもある）です。逆に一一（二）は一に還元します。一と一一は表裏一体、不離一体、物心一如です。同時内包とか、表裏一体とか、同存とは、図－１において、「もの・こと」の本源（一元氣）・本質を探り当てるためには、図－１b～１eを重ねて透かして見るというイメージで



捉えることです。溶かされて一方が他方に置き換わる、あるいは別のものに変異いることではない。
なお、原図は図-1eの上は中央に「性」を入れています。

その2；陰陽と分類・認識二分法（図-2を参照）

最上位クラスの「本源」から陰陽に分かれてAとBに成ったとしても、Aは純陰、Bは純陽ではなく、「陰中陽あり、陽中陰有り」からして、陰Aは陽を内蔵した一と見做し、陽Bも陰を内蔵した一と見なす。これが梅園のいう一々です。一の中に「一、一」がある、その「一、一」は対同して「二」になるのではなく、その^{さんりつ}燦立した一々がそれぞれにおいて新たな「一」に成るということです。その新しい一々はそれぞれの一が片割れ（半分）の身となって、次の一を求めて、つまり、新たな片割れ（半分）を求めて分化発展していくということです。それでいて、一々は上位の一を求めて止まないのです。



言い換えると、一は分割によって等量の二（一）を展開する、しかも、同時に二（一）を結合して等質の一を形成する、これが一気の作用としての陰陽であります。Aを抽出すれば、Aは本源から分かれて陰を帯びてそのまま永久に陰ではなく、分かれた陰は同時に陽を生んで新たな陰陽の対となって次に展開して行くという捉え方をします。「その一を見れば」、例えば、Cにぶつかった時は、「比を反して以て彼を^ひ勾^{こう}し」、Cを反転させて、その対概念であるDを捉え、「^ひ彼此（あれとこれ）を以て一に合す」、それらを統合してAを見つめる。さらに、「その合、また^た佗（他）の一に望み」、Aの対概念Bを対置し、「分かちて以て反を知り」、Bを分化させてE:Fの対概念を知り、「合して以て比を知る」、BをAに統合する、言い換えれば、E:FをC:Dに統合することによって、C(陰)とF(陽)、D(陰)とE(陽)が並列関係（比）にあることを知る。

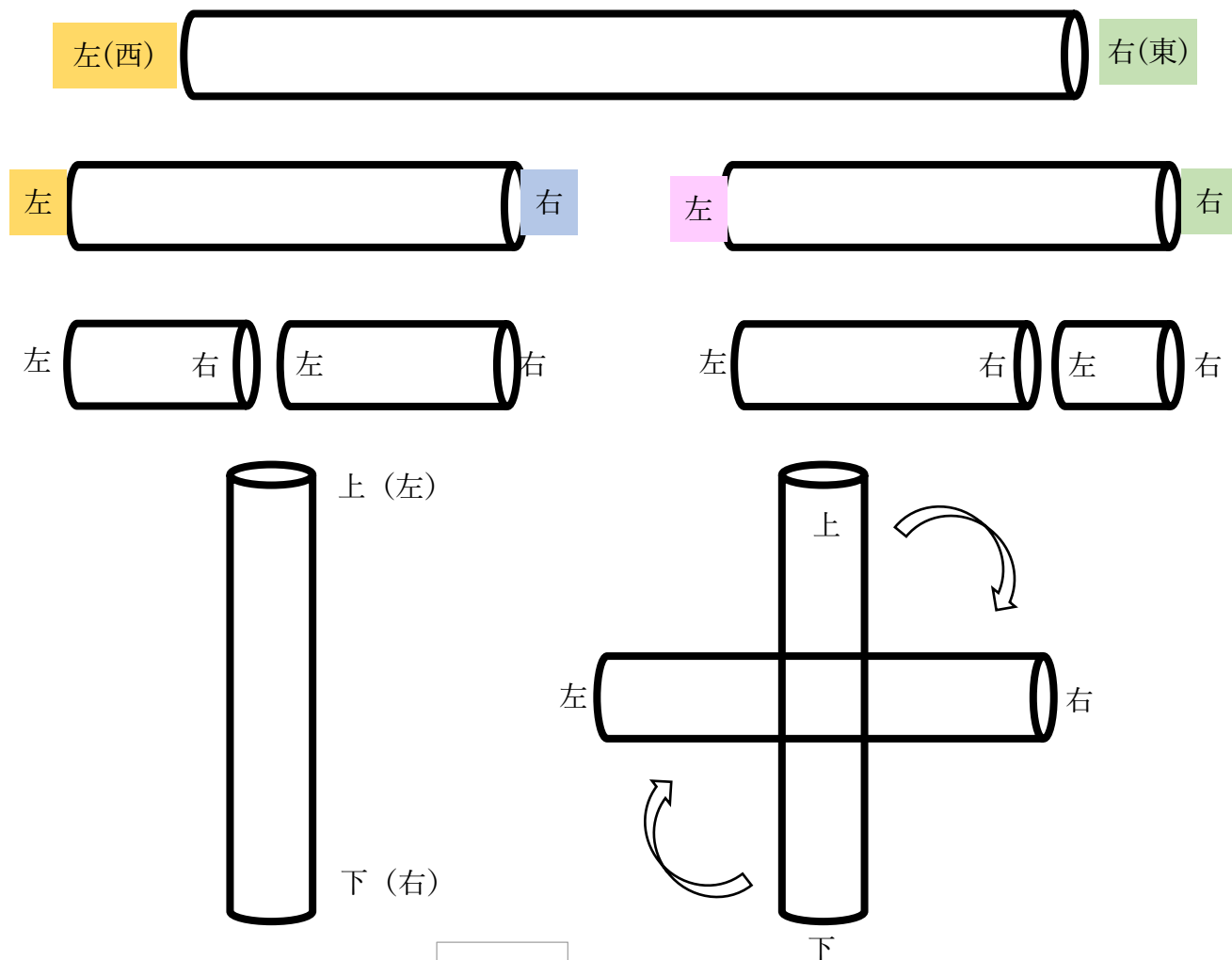
このようにして、AとBの、したがって、また、その統合としての最高次クラスの本源（一元氣）の正しい認識が完了する。森羅万象の存在が自らを展開していく過程は、高次のクラス「一」から出発して、「一」を「一（二）」に分化させつつ、次第に低次のクラスの「一」に至る。梅園流に言えば、対岸を望みつつ流れを下る処にあるとすれば、本物（真実・真理）の認識の方法はその過程を逆に辿り、低次の「一」から出発して、「一（二）」を「一」に統合しつつ、次第に高次の位置に辿りつく、つまり「合し合して源を^{さかのぼ}る」処に立つ、これが「反観合一」という方法に他ならない。対概念を立てては統合するという操作を繰り返しつつ、純陰でもなく純陽でもない、最高の一者、本源的存在、すなわち最高次クラスの一元氣に到達した時、認識の全過程は完成する。

燦然たるものの中に混然たるを見——陰陽二元性の中に、その裏側に、その奥底には必ずや本源を見出し、混然たるものの中に燦然たるものを見る——いや、本源と見える中に陰陽二元性の兆しを見ることです。あるいは、同じ対象の中に両者を同時に見ることによって、人は初めて真の認識に、したがって、実践に到達することが出来るということです。

現実的な意味合いで応用するとすれば、図-2中の0クラスに表示した本源（一元氣）は、目の前の課題とするテーマ——^{スターティング テーマ}Starting Theme(Topic)——とすると分り易くなります。

その3；「一即一」、「一即一」さらなる理解のために

□例1；図-3参照のこと。一本に断ち切った竹の管をここに用意します。そこには必ず二つの端口が出来る。その端口の一方を憎んで切断してこれをなくそうとする。そうして、二つに断ち切ると、その一つ一つそれぞれにまた両端が出来る。断ち切り方は左右に切るとも、上下に切るとも表現は様々だが、切られて出来た一本一本に両端が生じて端口（左右あるいは上下）は離れない。実は左右・上下は定めがたいのだが、しかし、分かれるということはきっぱりと二つに分かれる。左が上を向けば右は下を向き、左が西を向けば右は東を向く。同じ所がない、これを反という。また、その対極を成す二つは離れることはなく、かつ、その対極の対を以て一つ（一本、一管）を成すものである。それらのことは断ち切った物の長短、大小に関らないのです。一つの管には必ず両端がある、これが「一氣即陰陽」（一即一）である。両端があつてこそその一つの管である、これが「陰陽即一氣」（一即一）であることになります。



図－3

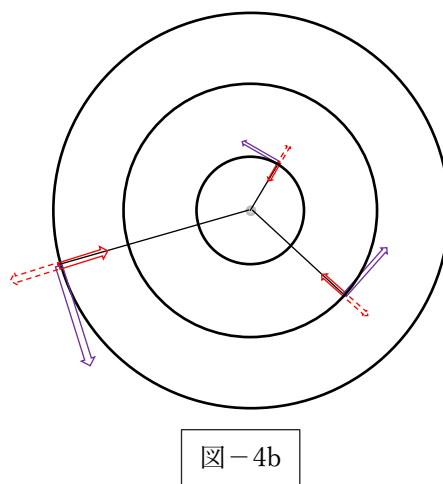
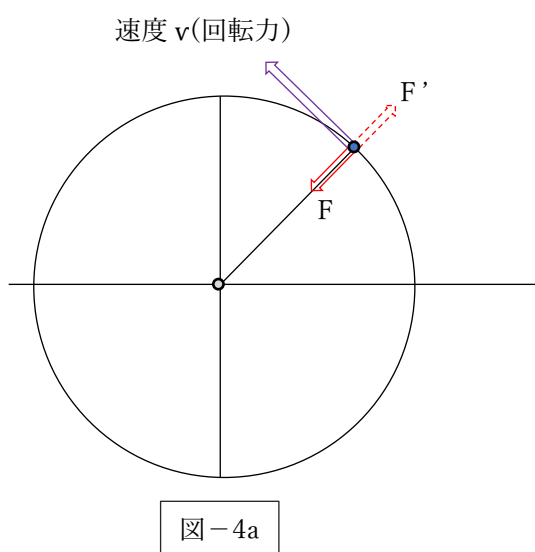
□例2；ある人が東の方に行くとして、東へ百里近付いた時には、西から百里遠ざかったのです。行くは一つだ、だが、近付くと遠ざかるとは相反・対極する二つのことだ。磨^{うす}を廻して見ると、半分は自分の方に来ると、半分は自分を去って行くのだ。廻るといえるのは一つで、来ると去るは二つなのだ。往かなければ来るといえることはない、往くと来るとの二つが止む時は、廻るといえる一つもない。近づかなければ遠ざかるといえることはない。近付くと遠ざかるとがない時は行くといえる一つもない。この二つとは反して対するものです。

□例3；波に譬えれば、寄せる波を陽、引き返す波を陰とすれば、反対の方向に活動する波といえども一つの水に過ぎません、寄せれば返し、返しては寄せる、陽から陰へ、陰から陽へと絶えず転化消長します。波が収まって寄せ返えが無くなっても水は無くなることはありません。一即一一、一一即一という条理が、あらゆる現象や存在を貫いていると考えた。また、一即一一の一を円に、一一を直と捉えることであらゆることを直と円で説明しています。図－2において、「もの・こと」の本源（一元氣）・本質を探り当てるためには「一即一一、一一即一」という条理を以って捉えることであるといえます。

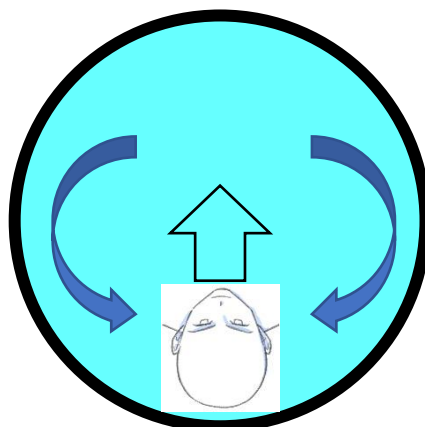
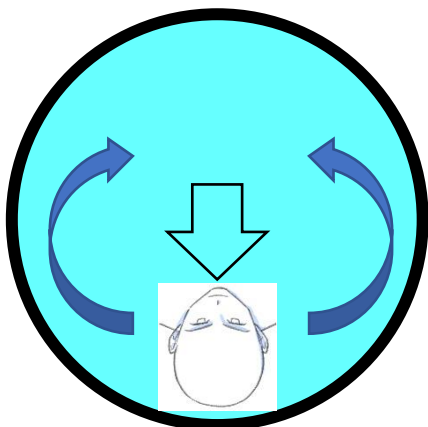
私が思うに、如何なる集団・組織にも「2・6・2の法則」が自立するということが浮かびました。上品^{じょうぼん}（シェア 20%）・中品^{ちゅうぼん}（シェア 60%）・下品^{げぼん}（シェア 20%）、つまり、上中下（優等 20%、

普通 60%、劣等 20%) の三ランクに分けられます、分かれます。例えば上品（優等）の人だけを集めて見ると、その中にまた「2・6・2の法則」が自立します、どのようにいくら分割しても、分割された新集団内の人に差異（優劣のランク付け）が生ずるということです。

□例 4；(図－4 参照)、物が動くとき回ると、^a求心力と^b遠心力の平衡を以って^c回転力（速度）が生じます。同心円状において、如何なる点においても同等の力が作用します。そこで、同心円を極小化して行く（中心に絞って行く）と、中心においても三つの力（abc）が生じその力関係を失わずとも混成・全一化して三つの力（abc）の存在が消えて行きます。逆に同心円を外側無限大に拡大して行くと三つの力（abc）はそれぞれが無限大に増長します。これらの動きは一つの円（無限大に拡張・縮小してイメージ）においては相似同価を維持しつつ、したがって、一つの物が大小・長短になったに過ぎません。



□例 5；(図－5 参照)、「桶（タライ）の水」に譬えます。水を手前に引き寄せると、手前にあった水はふちを回るようにあちら側に離れて行きます。逆に、手前の水を向こう側に押すと、向こう側にあった水がふちを回ってこちら側に近付いて来ます。「引き寄せる」と「離れる」は反対の動きですが、一つの水に変わりません。

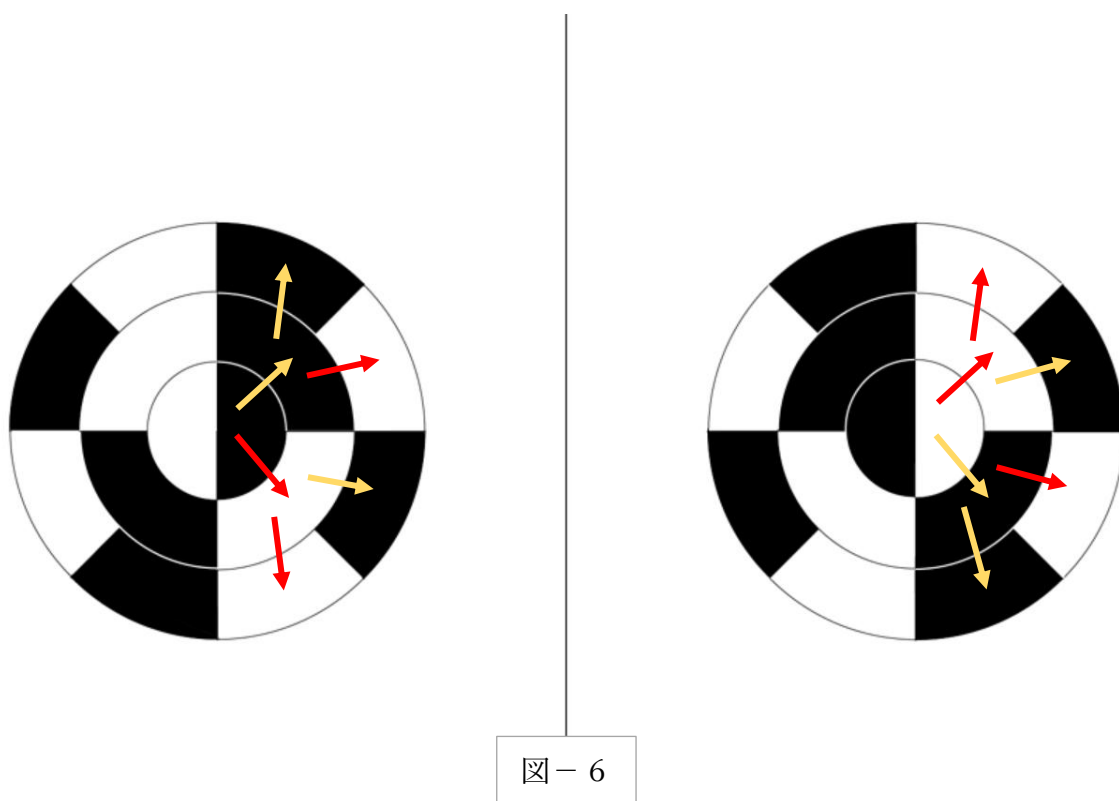


- ・ 別の視点から「桶（タライ）の水の人生訓」についてです。図-5a は我欲の強い人と重ねます。損得勘定に長けて利害に強い関心があり、自己の得に執着する人——引き寄せることに執着する人は、結局は離れて行くものが生じ、失うものも出て来ることになります。逆に、無償奉仕の精神を持っている人——自分の持てるものを向こう側に押してやる人は、結局は廻り回って自分に良きことが巡って来るものであります。
- ・ ある人曰く「西洋の鐘は『カーン、カーン』つまり『カム、カム (come come)』でこっちへ来い、こっちへ来いと鳴り、東洋（お寺）の鐘は『ゴーン、ゴーン』つまり『ゴー、ゴー (go go)』であっちへ行けあっちへ行け」で反対であると。

その4；陰陽の視覚化

図-6を示し、2枚は別々のものではなく、ずらし重ねて一枚にし、透視してイメージします。重ねて見ると、分けて陽と見えた部分にも、実は陰がその中に偶していない所はない。分けて陰と見えた部分にも、実は陽がその中に偶していない所はない。だから、つまり、陰も行き渡らない所はなく、陽も行き渡らない所はない。昔の人は純陰とか純陽とか言ったけれど、それは適切ではない。陰陽というものはどこまでもいつまでも相対偶するものである。先の例示のとおり、一本の管は本でない所もなく、末でない所もない。来ることを除外して去ることはないのと同じである。

白+黒=灰色、灰色は文字通り、白の質と黒の質を、つまり両対極の質が重畳している状態である。



分合圖一合

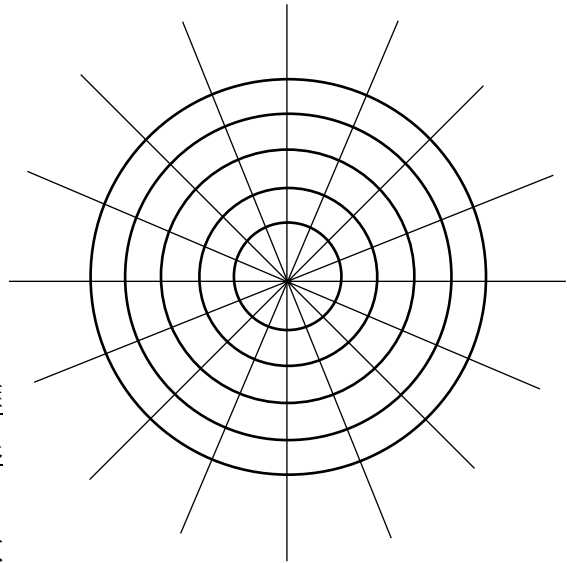
その5；直円

梅園は反観合一の一面として、陰陽二元世界を抽象化・図形化したものを図-7のように表します。「一即一一、一一即一」の基本概念の表し方の一つです。

円は無数の同心円を描きながら無限に拡大して尽きることはない（球におけるイメージでもよい）ことを表します。円には上下四方はない。円はどこから見ても円であり、どんなに位置を変えても円であり、まさしく、円は無為自然である。

直線は横たえれば平、傾ければ斜、両端を合わせれば円、回転させても円、それを折れば三角・四角・・あらゆる多角形にすることが出来る。あらゆる角や面を構成出来るという面ではその全てを具えていることになる、のみならず、直（直線）はどこから見ても、どの位置においても直であり、まさしく、直も無為自然である。

無限の同心円とその中心から放射状に伸びる無限長直線には本末はないと見る、しかし、同じ無限の性質を持ちながらも円と直では形は異なる、直線上において中心からの等距離を結べば円が出来、円上において等角度の点を結べば直線になる。



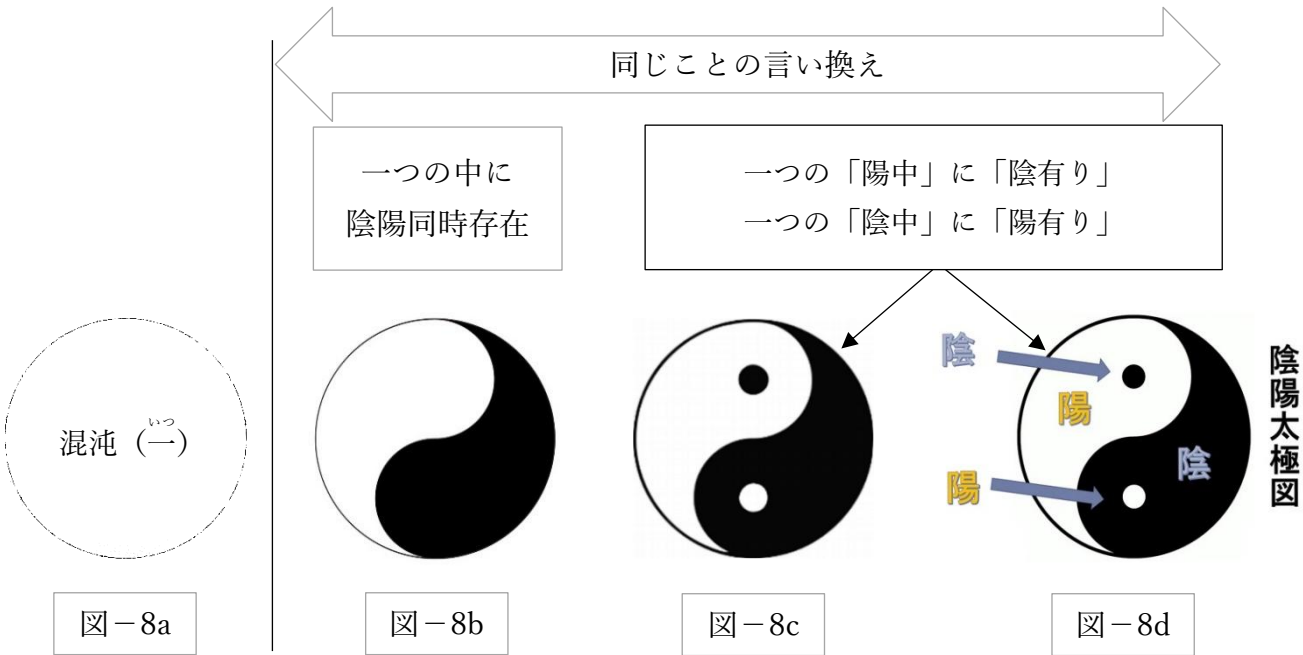
図－7

このことを円と直は混成して全体化すると意々、その象徴は中心点となる。かつ、円直は転持という陰陽の性を持つことと重ねている、転とは回転、活動を、持とは静止、平衡の意である。円にも直にも転持の対極両性を具有する概念を与えたものである。なお、円が陽であれば直は陰、円が陰であれば直は陽となり、固定したものではない。

「円は閉じている、有限エリアを切り取る」、「直は開いている、無限遠点を伴う」というイメージを与えられて、円は陰、直は陽と重ねられ。

その6；以上は「陰陽魚眼太極図」と同価・同値

私見、梅園の考え方は図－8のとおり魚眼太極図の別角度からの譬えようだと思います。「陰陽魚眼太極図」は、陽の目（芽）を持った陰と、陰の目（芽）を持った陽が隣り合って、陣取り合戦をしている、常に、瞬時もせめぎ合っているというイメージです。せめぎあっているというのは、陰陽それぞれ

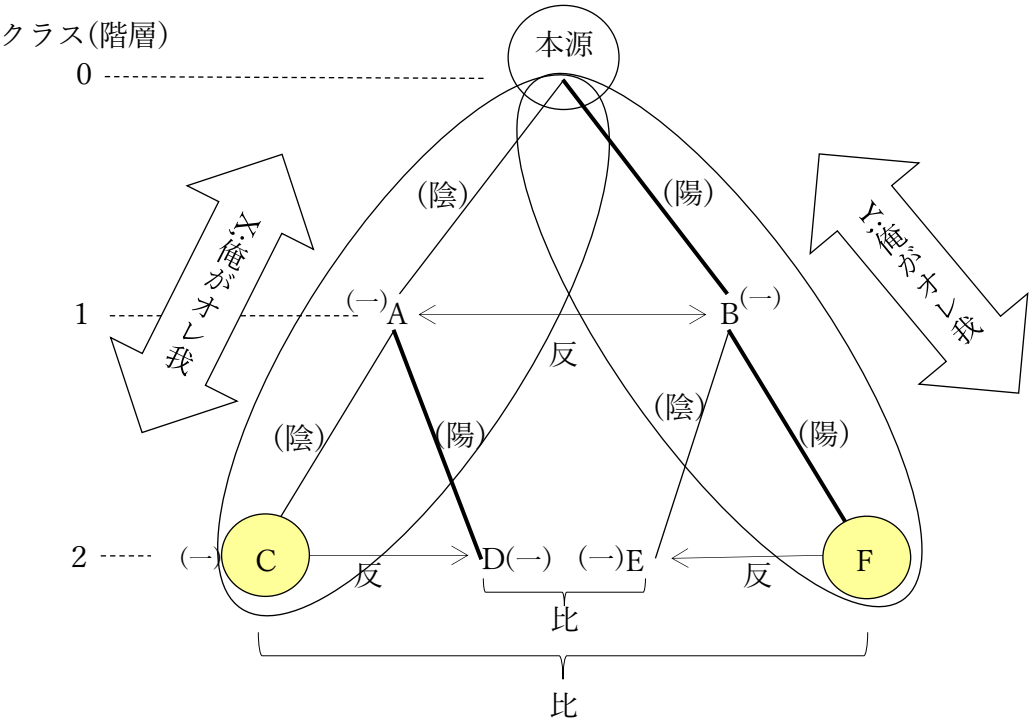


れの大きさが固定されず瞬時たりとも動いているということです。

梅園流に言えば、「もの・こと」を構成・組織する極微の細胞レベルにおいても、陰陽が重なって充満している（前記図－6のイメージ）ということです。

.....

✓¹；図－9（前記図－2の再掲）参照のこと、世の中には、あらゆる分野において、「俺がオレ我」と持論^まを捲くし立てて自慢する堅物人間が跋扈している、“俺の考えは一貫性がある、俺には揺るぎない信念がある。俺は固い確信に基づく”と豪語する偏波人間が横行闊歩し、本人は本源に到達していると思っているだろうが、真実は先入観、固定観念を振り回しているに過ぎず、まったくの錯覚・妄想・虚妄で語っています。図－9において、X、あるいはYの部分範囲内で騒いでいるだけです。



図－9

真に本質を弁えている人は、「反観合一」を以って、他者に微塵の疑義も惹起させない「心・言・行」全業^{ぜんごう}一致の人間です、「一即一一」「一一即一」の実践者です。

✓²；「反観合一」の具体的実践の在り方としては、次のように率直・謙虚になれるかということです。

- 自分の考え方と正反対はどうなのか？
- 自分の考え方は間違っていないのか？
- 自分の考え方に対して別の考え方はあるのではないのか？
- 自分の考え方は相手の考え方と優劣付けがたく五分五分ではないのか？
- 自分の考え方は所詮 77 億人分の砂粒に等しいのではないのか？

「上には上がいる」ものだと思えるか？

ならば、他人の意見・考え方を否定しないことです、相手を否定する言葉を発しないことです。相手を否定する言葉を吐いた途端、それは自己の全てを絶対化した証左であります、相手を否定するということは自分のみを肯定するということと同値です、すなわち偏波人間の宣言でもあります。偏った一方的な流れに乗った証拠でもあります。

(end)